

論文

ロプシャイドが教科書に記述した近代漢語

塩山正純

要旨

本文以19世紀的基督教傳教士羅存德的英語教材《英語文法小引》和中文教材 *Grammar of the Chinese Language* 為核心資料，通過其內容的考察和分析，概括一下羅存德即近代西洋人對當時的漢語有看法。羅存德以廣東方言和官話作為比較研究的對象。通過本文指出的這兩本著作的幾項特徵，我們可以看到，羅存德分析漢語時以英語語法為基準，對漢語的詞類，尤其是量詞，代詞，數詞，動詞和時間表現等諸多方面進行了全面而詳細的考察。在本文簡介的羅存德的两本著作，我們也可以說是在19世紀60年代有代表性的一个西方學者對漢語研究的一項非常值得關注的成果。

キーワード：ロプシャイド 近代漢語，漢語方言，官話，中國語の品詞分類

0. はじめに

ロプシャイドは19世紀のドイツ人宣教師である。ロプシャイドは1822年にドイツのグンマースバッハに生まれ¹、1844年22歳で奨学生として Rheinische Mission Gesellschaft（ライン地方宣教会：筆者注）の神学校に就学し、1847年には宣教師としての専門教育を受け、神学と医学の博士の学位を取得した。そして、1848年には香港に渡り、主に医療伝道の活動に従事した。1851年に一旦帰国するが、1853年には再び中国に赴き、本格的に漢語への翻訳と漢語研究に従事し、1866年から1869年にかけて、その漢語研究の集大成と言われる『英華字典』を編纂した²。1870年に帰国するが、1874年にベルリンに在住していたというのが彼に関する最後の記録で、その後の消息についてはそれを記録した資料がない。ロプシャイドの英語と漢語に関する著作としては1864年に出版された2冊の教科書がある。1つは『英語文法小引』（以下『小引』と略称する）であり、主に漢語の例文によって英語の文法を解釈している。もう1つは *Grammar of the Chinese Language*（以下《Grammar》と略称する）で、主に漢語の官話と広東方言をその記述の対象としている。とくに後者は漢字、方言、語音、語彙構造、語法構造、品詞分類など多方面にわたって分析を行っているが、ほぼ全体的に英語の文法を基準として漢語の品詞を11種類に分類してそれぞれ解釈を加えている。本稿が考察の対象とするこの《Grammar》は、ロプシャイドの漢語研究そして『英華字典』の編纂・出版の基礎としても知られる³。本稿はこの《Grammar》と『小引』の記述に関する考察を通して、ロプシャイドの漢語に対する見方の一端を明らかにしようとするものである。

1. 中国語と方言

漢語の漢字と方言について、ロプシャイドは英語の文を漢語に翻訳するという手法で、彼自身の解釈を紹介している⁴。ロプシャイドはまず各方言が使用する文字（つまり漢字：筆者注）に大きな差異があること、さらに漢語の口語と書面語との間にも大きな差異があり、漢語に“speak as you correctly write, and write as you correctly speak”の原則は当てはまらなると認識している。

ロプシャイドは《Grammar》の序論の中で、漢語の方言間で語音の差異はさらに重視すべき問題であり、漢字ではなく語音の面から分析するならば、各方言間の差異は、あたかもヨーロッパの各言語間の関係のようである、と記述している。ヨーロッパ人の常識から見ると、漢語の異なる方言同士はまるで別の言語であるかのようで、もしそれらの各方言をローマ字で記述したとすると、この考え方は容易に理解できる、とも述べている。同時にロプシャイドは、中国が漢字文化圏で支配的地位を占めている事実についても、漢字が表意文字として

担っている役割を鋭く指摘している。

このほか、ロプシャイドは語音の面で入声についても分析しており、南北間の差異を1つの方言と2種類の官話に3分類し、広東方言と客家方言の入声は p, t, k を明確に区別し、広東から北上すると、例えば、南方官話では入声の p, t, k は不明確になり、さらに北上すると、北方方言（北方官話）ではすでに入声音は認識できなくなり、その音節は韻母に集約されている、と述べる⁵。

さらに、ロプシャイドは漢語の口語には一定数の「接尾辞的動詞」があることをテーマに、現代漢語で言うところの結果補語、方向補語の構造について取り上げている。ロプシャイドはまず、動詞を単独で用いることは減多に見られない現象であり、ある動詞が語義的に非常に大きな差異のある別の動詞の後につづくこともある、と指摘する。それゆえ、ロプシャイドは前に位置する語彙を‘root（根）’、後ろの語彙を‘termination（接尾辞）’と呼び、この形式によって連接される語彙を‘termination（接尾辞）’、或‘Dissyllabic words（二音節語）’と呼ぶ。ロプシャイドは、この事実がその後の漢語研究にとって大変重要であると認識し、‘住、起、却、到、倒、出、去、埋、来’などで構成されるフレーズを列挙し、さらに‘打’によって構成される幾つかの例文を加え⁶、動詞の多義性について説明している。

2. 中国語の音声の分析

ロプシャイドは《Grammar》本文冒頭の数ページで、漢語の語音に関する幾つの特徴についても取り上げ、彼以前の欧米人研究者と同じく、漢語の語音が‘tones（声調）’、‘aspirates（有気音／声母）’、‘vowel sounds（韻母）’の3要素をもつことを指摘している。その中で、ロプシャイドはまず声調について、官話の声調が4つで、客家方言は6つであることを指摘し、さらに音楽の五線譜の形式を用いて広東方言の8つの声調について詳しく解釈を加えている。同一の音節が声調の違いによって語義変化を生じる問題（破音、多音字：筆者注）について、ロプシャイドは‘悪、為、好’などの字を例に説明し、さらに有気音と無気音、狭母音、普通韻母、開口音の韻母などの幾つかの韻母とその音長の問題にまで言及している。

3. 中国語の複合語の構造に関する分析

ロプシャイドは‘Compounds（複合語）’は4種類あると認識している。1つ目は“木匠師傅、千里鏡”などの記述的複合語（descriptive）で、2つ目は“兄弟、姊妹、婚姻”などの説明的複合語（explanatory）で、3つ目は“查察、應驗、試煉”などの同義的複合語（synonymous）で、4つ目が“體見”などの音声調和の複合語（symphonious）である。同時にまたロプシャイド

はその他の複合語の語順の重要性についても指摘しており、語順の交替は3つのパターンに分類できるとしている。まず1つ目は“歡喜，往來”などの前後を入れ替えられるパターンである。2つ目は“家主，面前，酒杯”など前後を入れ替えられないパターン、3つ目は“攻打／打工，功勞／勞工”などの前後を入れ替えられるが語義に変化が生じるパターンである。とくに3つ目のパターンについては、漢字という表記の面から見ればその違いは一目瞭然であるが、ロプシャイドはあくまで語音の面から言及しており、これは彼の漢語に関する記述における1つの特徴であると言える。

4. 虚実論による品詞分類

ロプシャイドは中国の伝統的な虚実論によって⁷、漢語の文字或は語彙を“虚字，實字，助辞假借”の3つに分類した⁸。“虚字”は不変化詞あるいは介詞で，“實字”は動詞，名詞など，“助辞假借”は補助の働きをもつ品詞の1分類で，“auxiliary（助動詞）”とも言う。このほか、ロプシャイドはさらに名詞，形容詞，動詞などの“實字”についてさらに一步すすんで“活字（動詞）”と“死字（名詞，形容詞）”の2大類に分けている。そして、基本的には英語の文法の品詞分類によって⁹、漢語の品詞を量詞，冠詞（冠詞，不定冠詞），名詞，形容詞，代名詞，数詞，動詞，副詞，介詞（前置詞），感嘆詞の11類に分類した。

しかし、ロプシャイドはこれらの品詞を分類した際に、その英語名称に対応する漢語の名称をとくには与えていない¹⁰。ロプシャイドはまた《小引》の中で英語の語彙について品詞分類するには漢語による名称を与えている。“Noun”を“名字”とし、さらに“Noun”を“Common Noun（類通名字，括弧内は『小引』で与えられた漢語名称で以下同：筆者注）”と“Proper Noun（本名字）”の2つに分類する。その他それぞれ“Article（定名字）”“Adjective（勢字）”“Verb（活字）”“Adverb（定活字）”“Pronoun（替名字）”“Preposition（定倫字）”“Conjunction（継字）”“Interjection（情呼字）”とする。ロプシャイドは《Grammar》では分類上の漢語による名称を与えてはいないが、量詞と名詞に関する分類を除けば、分類に関する考え方は基本的には『小引』と同様であることから、ここに挙げた品詞の漢語名称がロプシャイドの考えたものであると見て差し支えないであろう。

5. 11種類の具体的な品詞に対する分析

5. 1 Classifiers（量詞）

ロプシャイドの解釈に基づけば、漢語の中で数字と関係する表現とは、あらゆる名詞の前或は後に必ず付く量詞（分類詞）である。よってロプシャイドによれば、漢語の一部の量詞

の概念は英語における“herd of cattle”の“herd”, “sheets of paper”の“sheet”, “pieces of silk”の“piece”などの語と完全に一致する。彼はさらに「学習者はさらに深く学習する前に、まず量詞をマスターしなければならない」とも述べ、漢語の量詞の機能を非常に重視していることが分かる。ロプシャイドは《Grammar》の中で78種類の具体的な量詞“個（個，箇），隻，對，雙，把，張，枝，條，間，座，度，幅，陣，粒，場，隊，羣，筮，副，件，塊，團，堂，行，架，朵，片，席，包，劄，封，刀，本，套，部，匹，嚇，串，乘，脫，股，局，竿，炷，夥，文，門，口¹¹，咸，方，疋，顆，段，欸，位，圓，員，層，頁，道，貼，點，擔（擔），重，辣，口¹²，面，宗，尾，檯，板，株，根，管，頂，句，盞”を列挙したうえで¹³，これら以外の量詞は口語であれ，書面語であれ，一般的にほとんど見られないものであり，学習者が必ずしも覚える必要のないものである，とも認識している。

5. 2 Article と Indefinite Article（冠詞と不定冠詞）

ロプシャイドによると，常用される冠詞には“此，斯，彼，其，那個，這個（広東方言では：呢個，個，箇）”などがあるが，不定冠詞は数字（数詞）の“一（yat）”によって表現される¹⁴。これについてロプシャイドは，個別の名詞に常用される類別詞，つまりいわゆる量詞は“一”に後置され“一+量詞+名詞”の構造を構成するが，これは文言には滅多に見られない構造である，と述べる。

5. 3 Noun（名詞）

ロプシャイドは名詞そのものの問題には深く踏み込んだ解釈を示していないが，漢語には形容詞の“男”“女”のように生物の性別を表す現象があることに言及し，対比を表す語彙として“陰陽，乾坤，雄雌，公母，牡牝，剛柔”などを挙げている。漢語の名詞に事実上性別の区別が無いという現象にロプシャイドが特別な関心を示すのは，或は彼の母語がドイツ語であるという背景と密接な関係があるかも知れない。

このほかに，ロプシャイドは広東方言の“我嘅門徒”は“我的門徒”でもあり同時に“我的門徒們”でもあり，名詞そのものが単数も複数も表すことができることを指摘している。また，数量を明確に示す必要がある場合に，名詞に“等，們，輩，類，曹，齋，儔”などが後置され，そのうち“們，曹，儔，儔”は人間を指す語彙にしか後置できないこと，“輩，類”もまた人間を表す語彙に後置されること，“輩”の前には通常は例えば“惡輩”のように形容詞がくること，“輩”と“類”は例えば“人類”のようにいずれも階層や種類の概念を表す対象に後置されることを指摘している。さらに“各，諸，眾，凡，庶，都，皆，偕，鹹，俱，僉，萬，總”などが名詞の前に置かれることも指摘している。

5. 4 Adjective (形容詞)

形容詞については、ロプシャイドは形容詞そのものではなく、比較の表現を中心に解釈を加えている。形容詞が“的”とともに用いられる場合には、形容詞「原形」だけではなく往々にして比較級の意味も表すことができ、形容詞の比較級は基本的にはいずれも“此人比此人更高”の形式によって表される、と指摘する。ロプシャイドによると、このほか“比～，更於～，越～越～，～又～，愈～愈～，尤～（例えば：尤惡，尤怪，益好），不如，不若，莫若”などの比較の意味を表す形式があり、さらに比較最高級は主に“至，最，甚，僅，盡，切，深，絶，殊，極”などの語彙によって表現され、“～得很”そして“十分多謝你”“千萬不行”といった“十，百，千，萬”などの数詞によって程度が最高であることを表すパターンがあることも指摘している。

5. 5 Pronouns (代名詞)

たとえば、ロバート・モリソンは人称代名詞について言及する際に、中国人は西洋人が想像するような人称代名詞を使用することが減多になく、往々にして名詞によってその称呼に代替することを指摘した。これに対して、ロプシャイドは基本的にはこれと同様の考え方に立って、9つの異なるパターンを提示している。

先ず第1は“Personal Pronoun”（原文ママ：以下の第三人称と同じ。）で第一人称のこと。皇帝が使用する第一人称の“朕，予”と“寡人，寡仁”を除いて、一般的には“我，吾，餘，予，俺，甫，俗”などが第一人称を表す。しかし“愚弟，學生，門生，晚生，後生”などの語彙は比較的特殊で、一般的には親戚同士や学者の間で用いられる。複数を表す場合は、各種の呼称に“～們，～等”などの形式を用いる¹⁵。

第2は“Second Person”で第二人称のこと。一般的な第二人称としては“爾，你，汝，若，如”などがある。第二人称の代替として使用されるものに“尊駕，先生，相公”などがある¹⁶。

第3は“Personal Pronouns”（原文ママ：上記の第一人称と同じ。）は第三人称のことで、一般的な第三人称には“其，他，伊，渠，佢，之”などがあり、そのうち“伊，伊等（“等”は複数）”は一般的な会話や文学作品の中ではほとんど見られないが、法律文書や布告などの文書にはよく見られる。このほか“之”は目的格としてしか使われない。

第4は“Possessive Pronouns”で所有格の人称代名詞のことであるが、漢語には単独で所有格を表す形式はない。官話で所有格にあたる表現は“我母親，我國，你阿爹，我的皇上，厥德”などであり¹⁷，所有格に代替する形式としては“家父，父親，家兄，舍弟”などがある。

第5は“Demonstrative Pronouns”で指示代名詞である。官話及び書面語では“此，斯，是，茲，這，其，夫”や“者，彼，那”などの指示代名詞があり、例えば“這個人，這樣，其人，這時，這等，其夜”のように使用される¹⁸。

第6は“Relative Pronouns”関係代名詞であり、これに該当する“所，者”には“必所思，所謂善，人所樂，你所欲，佢所倚賴者”などの用例がある¹⁹。

第7は“Reciprocal Pronouns”で相互の関係を表す代名詞であり，“自，己，親，躬，身”などの語彙が“自己，自家，本身”などの用例のように相互の関係を表す。

第8は“Interrogative Pronouns”で疑問代名詞である。官話の疑問代名詞には“誰，孰，何，如何，若何，怎麼，甚麼，什麼，那個”などがある²⁰。

第9は“Indefinite Pronouns”で不定代名詞である。英語のアルファベット順に“All”の“凡”からはじまり，“凡，眾，諸，庶，皆，概，都，俱，鹹，僉，齊，闔，共，悉，一切，盡，一統，大家”など合わせて18種類の不定代名詞に相当する漢語の語彙を挙げている。なお現代漢語では、これらの大部分が副詞に分類されている。

5. 6 Numerals (数詞)

5. 6. 1 数字に関する見解

ロブシャイドは《Grammar》で最初に漢語の書面語の数字を、基本の数目を表す字，“大寫”の数目を表す字，“花碼（或は蘇州碼）”の数目を表す字の3種類に分け、基本数字の1から10までを解釈する際に“兩”が通常では口語で“two”を表す語彙であることも明確に指摘している。さらに2桁、3桁以上の表現と“0”で終わる数、中間に“0”がある数などの表現形式についても詳しく解説している。このほか、ロブシャイドは列挙した多くの実例から“一心一意，無一不知，三寶，三才，六合，七政，八方，十分，百千萬”などの成語や慣用句についても詳細に説明している。

ロブシャイドは数詞 (Ordinal Numbers) と順序 (Quotation Numbers) と動量詞 (Numeralia Iterativa), 乗法 (Multiplication Numbers), 分数 (Fractions) などの表現形式を数詞の下位分類に置いて考察し、それぞれ助数詞と順序を表すものとして“第一，第二，第十，第一百，鹹豐十年，四月，正月初十，卷五”を、動量詞として“次，回，翻，遭”を²¹、乗法の表現として“單衫，重複，雙口劍，三重，兩倍，加四倍，十倍”を、分数として“一半，三分一，三分之一”など数多くの用例を挙げている。さらに、容積 (Capacity), 長さ (Length), 地理的区分 (Geographical Divisions), 土地面積 (Land Measures), 重量 (Weights) などの度量衡の単位についても詳細に説明している。

5. 6. 2 時間表現に関する見解

ロブシャイドは漢語の時間表現を、数詞に関係する重要な項目として注目しており、《Grammar》は時間幅の長短の順に、60年のサイクルを表す“花甲子”，太陰暦の1年の日数と閏月，ひと月と10日を単位とする“旬”，二十四節気などについてそれぞれ詳細に分析し

ている。つづいて1日24時間のサイクルの中の様々な時段とその漢語の呼称について解説し、1日の時間の基本単位を“1日 = 12時辰 = 96刻 or 刮 = 1440細微 = 86400seconds”のように描いている。ここで言う“時辰”は中国の伝統的な時間単位であり西洋の“2 hours”に相当する。これに関連して、“子”の刻から“亥”の刻までの十二支によって表される中国の伝統的時間表現と、“Twelve o'clock”を境界とする“Forenoon, Twelve o'clock, Afternoon (上午, 正午, 下午)”の表現, “初更”や“五更”など“更”による夜間の時段の表現, さらには“現在十二點鐘, 係兩點半鐘, 係九點鐘零一刮”など西洋式的时间表現に至るまで, それぞれに解説を加えている。

5. 7 Verb (動詞すなわち“活字”)

ロプシャイドは動詞そのものについては触れずに、動詞と関連する様々な表現や、いわゆるアスペクト、テンスなどについて分析し、現代漢語の助詞にあたる“得”の3つの機能についても指摘している。“得”の機能の第1は“Auxiliary Verb”つまり補助動詞で、例えば“來不得, 做不得”のように可能を表し、第2は“惹得滿臉如火”のようにいわゆる様態補語を導く位置におかれて転換を示し、第3は“省, 免”との接続である。ロプシャイドはさらに“著”を用いて未完成、完成の時制を表すこと、使役の不変化詞“使, 令, 俾”や“致”が口語の会話の中で広く使われていることを指摘している。

またロプシャイドは《小引》の中で英語の動詞の“Tense”を説明する際に、“Tense”は漢語の“時”にあたるとする言い方で、これを“present tense (現在)”, “past tense (過去)”, “future tense (未来)”の3種類に分けて、さらに“present complete tense (現在完了)”, “past complete tense (過去完了)”, “future complete tense (未来完了)”の3種類を加える。また“Tense”は《Grammar》の中でも6種類に分けられているが、例えば第1は“我寫”のような“present Tense (現在)”, 第2は“我將寫”のような“1st Future (第一未来)”, 第3は“我將曾師徒我既銀”のような“2nd Future (第二未来)”である。漢語のアスペクト、テンスを表すその他の類型について、ロプシャイドは書面語であれ、口語であれ、“Imperfect Tense”, “Perfect Tences”, “Pluperfect Tenses”の3種類が前後の文脈の関係に依って別の種類に解釈される場合があると認識している。完成と未完成のマーカとなる語彙については、完成を表す語彙として広東方言の“曾, 堯, 了, 已, 已經, 過, 唬, 喇, 咯, 囉, 囉囉”と書面語の“畢, 已, 已經, 既, 完, 曾, 訖, 了”, 未完成の“則, 方, 在, 正, 正間, 正纔”などを列挙している。過去完了については“醫生入屋時其病人已經死了”の1例を挙げるのみである。

このほか、ロプシャイドは漢語の動詞には語尾の変化がないゆえに西洋の言語のいわゆる不定詞、現在分詞、過去分詞のような各種の形式が無いと認識し、それゆえに、漢語を学習する者はこれらの形式に相当する漢語の表現を覚える必要があることを指摘する。例えば

“我見欺騙”のような“Passive Voice (受け身文)”は“見, 受, 遭, 被, 蒙”或は介詞の“於, 于, 為”によって表現され, “Potential Mood (可能)”を表す文は“可愛佢”のように“可”によって表現される。“Conditional Mood (仮定)”は“如, 若, 倘, 儻, 猷, 苟”によって表現され, さらには“Optative (願望)”は“巴不得, 恨不得, 願, 欲, 要”によって表現されるが, “Imperative Mood (命令)”は動詞のみによって表現することができ, 後ろに“咯”を置けば強調の語気を表現することができる。“你是必去”のような類いは絶対的な命令を表すスタイルである。

5. 8 Adverbs (副詞)

ロプシャイドは英語の文法が副詞を11種に分類する方法によって²², それぞれに対応する漢語の語彙を列挙している。11種類の副詞とこれに対応する漢語の典型的な用例はつぎのとおりである。まず第1は場所副詞で“Here”に対して“這裡”, 第2に時間副詞で“Today”に対して“今日”, 第3に順序を表す副詞で“First”に対して“第一, 最先”, 第4に質と範囲を表す副詞で“Almost the same”に対して“差不多”, 第5は質と方法を表す副詞で“Especially sent”に対して“特遣”, 第6は形容詞, 副詞の比較変化形で“Equally well”に対して“一樣好”, 第7は暗喩の副詞で“How beautiful”に対して“美哉”, 第8は疑問副詞で“How”に対して“如何”, 第9は肯定と否定を表す副詞で“Undoubtedly”に対して“定然”, 第10は接続と分離を表す副詞で“Break it asunder”に対して“擘開”, 第11は結果と結論を表す副詞で“At last”に対して“收尾”がそれぞれ対応する漢語の意味として与えられているが, あくまで英語の文法にあてはめた記述であって, 必ずしも英語の副詞イコール漢語の副詞とはならないことがわかる。

5. 9 Prepositions (介詞)

ロプシャイドが列挙する“About, round about”にあたる“周圍”, “About, nearly”にあたる“大約, 差不多”, “Above”にあたる“上”, “Except”にあたる“除, 除此之外”, “From”にあたる“由, 自, 從”, “Since”にあたる“既然”, “With”にあたる“與”などの語彙は, いずれも英語の介詞を基準として線引きしているため, 必ずしも実際の漢語の介詞とは一致していない。ロプシャイドはまた漢語には介詞を用いずに動詞だけで表現するような例があることも指摘している。

5. 10 Conjunctions (連詞)

ロプシャイドは, 漢語には数多くの連詞があるが, 西洋諸語の連詞のように同一カテゴリの範囲内に分類できるものではなく, その多くは“copulatives (連結接続詞)”“causatives (使役動詞)”“disjunctives (離接的接続詞)”として使用され, 例えば英語の“And”は漢語では“及, 且, 並=併, 而, 也, 與, 同, 連, 零”などの語彙によって表されると記述している。

5. 11 Interjections (感嘆詞)

ロブシャイドは、英語の語法に基づいて感嘆詞を、それぞれ“哀哉”など“Sorrow (悲哀)”を表すもの、“嘻嘻”など“Joy (歓喜)”を表すもの、“妙哉”など“Acclamation (喝采)”を表すもの、“莫怪莫怪”など“Admiration (感嘆と称賛)”を表すもの、“唏”など“Anger and Ridicule (憤怒と嘲笑)”を表すもの、“放屁放屁”など“Contempt (軽蔑)”を表すもの、“去罷”など“Threatening and Warning (脅迫と警告)”を表すもの、“嘻嘻”など“Imitation (擬声)”を表すものの8つに分類するが、あくまで英語に基づいてそれに該当する用例を挙げているため、漢語の用例については、例えば“嘻嘻”などの重複も見られる。

6. 品詞分類以外の語法項目

6. 1 格と接辞

ロブシャイドによると格には4類あり、まず1つ目は“Dative (与格)”で、例えば官話の“與、和、對、替、諸、於、于”など、広東方言では“同、過、共、埋”などが与格として使用される。さらに“Accusative (対格)”“Ablative (奪格)”“Vocative (呼格)”もあるが漢語のなかではほとんど使用されない、と指摘している。このほか、“Diminutives (接辞)”については、漢語では“仔、細、小”によって表される、とする。

6. 2 Expletives (助辞、虚辞)

漢語の助辞と虚辞について、ロブシャイドは書面語、口語いずれにおいても使用され、文を終わらせる符合としての機能を有しているために重視されるものである、と認識しており、この機能を5つに分類する。まず1つ目は語彙を複合する機能であり、“出乎德 = Proceeding from virtue”などがこれにあたる。2つ目は疑問符号(“?”にあたるもの：筆者注)に代替するもので、漢語は書面語であっても標点符号を使わないために²³、“乎、耶、諸、與(歟)、哉”などの虚字が極めて重要となる、と言う。3つ目は感嘆詞で、例えば“哉、乎、兮、夫”がこれにあたる。4つ目は直叙(敘実)の表現で“善者仁也、心不在焉、自然而然”がこれにあたる。最後の5つ目は“也夫、也哉、已矣乎、焉而已矣”などの助辞、虚辞の結合、或いは音便の不変化詞(接辞)である、とする。これら5種類の助辞、虚辞を挙げた上でロブシャイドは、もし漢語の口語表現においてさらに流暢であろうとするならば、“Aspirates”つまり声調と有気音のマスターが必須であることはもとより、さらに疑問助辞をマスターすることが、非常に重要なポイントである、ことを指摘している。

7. さいごに

ロプシャイドは《*Grammar*》の序論の中で、中国は数度の戦争を経て、北京語つまり北方官話がますます重視されるようになったが、相対的に見て、もう一方では方言の多様性についてもそれと同様に人々の関心を持つところとなっており、とくにロプシャイド自身が居住する広東地区の方言についての関心が高いことを指摘している。ロプシャイドの編んだ《*Grammar*》は、実際には1冊の漢語研究の著作であるにとどまらず、同時にまた広東方言を学習するための入門書としての性格も備えていたと言える。そして、ロプシャイドは、漢語をマスターすること、漢語の発音、漢字（或はその漢字語彙：筆者注）がかつてのヨーロッパにおけるラテン語の如く漢字文化圏で果たしている機能の重要性についても明確に指摘しているのである。本稿で見てきた通り、《小引》と《*Grammar*》における記述から、ロプシャイドが広東方言と官話を比較研究の対象としていたこと、記述に際して英語の文法を基準としていたこと、さらには品詞分類において、とりわけ量詞、代名詞、数詞、動詞と時間表現などについて全面的な考察を試みていることが明確に見て取れる。とくに量詞については、‘Classifiers’を量詞とは称さないものの、いわゆる漢語の量詞の語法的な特徴を明確に捉えていることは、近代の西洋人の漢語研究史においても特徴的なことであると言える。漢語研究の理論という点においても実践という点においても、本稿で取り上げたロプシャイドの2冊の著作、『英話文法小引』（《小引》）と *Grammar of the Chinese Language*（《*Grammar*》）は19世紀60年代の西洋人による漢語研究の1つの注目すべき成果であると言える。

註

- 1 グンマースバッハはドイツ西部のノルトライン・ヴェストファーレン州（Nordrhein-Westfalen）ケルン行政管区（Regierungsbezirk Köln）のオーバーベルギッシャー郡の郡都で、ケルンの東約30数キロに位置する。
- 2 書名は英華字典 *ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY WITH THE PUNTI AND MANDARIN PRONUNCIATION*. で、4部からなり刊年はそれぞれ Part I が1866年、Part II が1867年、Part III が1868年、Part IV が1869年である。
- 3 ロプシャイドの伝記については那須雅之（1995）「ロプシャイト小伝」『愛知大学文学論叢』109号に詳しいが、同じく那須雅之（1995）は、*Grammar of the Chinese Language* と『英華行篋便覧』が、ロプシャイドの中国語研究ならびにその『英華字典』の編纂・出版の基礎となっている、と指摘している。また、ロプシャイドの香港における教育については賀楠（2015）「羅存徳与19世紀50年代の香港教育」『或問』28号に詳しい。
- 4 ロプシャイドは《*Grammar*》の中で、「たとえば英語の“Will you go?”を漢語に翻訳するとしたら、どのように言うのだろうか。広東方言では“你去唔去呢”，客家方言“你去唔”，官話では“你去不去”となる」と記述している。
- 5 内田慶市（2007）「近代西洋人的汉语研究的定位和可能性」『関西大学中国文学会紀要』28号は、マ

テオ・リッチ以来の西洋人宣教師は、早い段階から漢語の文体には文言と口語の区別があり、口語の中には更に官話と方言の区別があり、官話にも数種類あることを認識していたと指摘している。また内田慶市（2007）は、官話について、モリソン（『英華字典』）は江南官話と河南官話、ウィリアムズ（『漢英韻府』）は南官話（正音）と北官話（京話）に分け、ロバート・トーム（『意拾喩言』）とバザン（1845）（『*Grammaire Mandarine*』）は‘北官話’と‘南官話’に分け、エドキンス（1857）は“Nanking, Peking, western”に分け、マティア（1892）（『官話類編』）は“Northern, Southern, wesern”の3種に分けていることを紹介している。また、19世紀の西洋人による官話の認識の変化と継承については塩山正純（2016）「近代西洋人は“官話”をどう見てきたか—19世紀の英華・華英字典の記述を中心に—」『関西大学中国文学会紀要』37号を参照されたい。

- 6 そのフレーズには“ 留住外国, 想起, 忘却, 知到, 得倒天下, 做出文章, 搬去, 撮埋, 写来”のような用例がある
- 7 例えば内田慶市（2005）「『馬氏文通』以前中国人的语法研究」『関西大学中国文学会紀要』26号によると、『馬氏文通』以前の中国人による語法研究である畢華珍『衍緒草堂筆記』は漢語の文字（漢字：筆者注）を実字と虚字の2大類に分け、さらに虚字を呆虚字（現在で言うところの形容詞）、活虚字（現在で言うところの動詞）、口気語助虚字（現在で言うところの代名詞、句末助詞、程度副詞、助動詞）、空活虚字（現在で言うところの否定副詞、疑問副詞、連詞）の4類に分けている。
- 8 内田慶市（2003）「近代欧米人の中国語語法研究と品詞名称の変遷初探」『関西大学中国文学会紀要』24号は、漢語の文字（すなわち漢字：筆者注）に関して、プレマール Premare（1724）（引用原文ママ、正確には1720：筆者注）*Notitia Linguae Sinicae* は虚字と実字（活字＝動詞、死字＝名詞、死実字＝名詞）に分け、マーシュマン Marshman（1814）は生字＝動字（動詞）、死字＝静字（名詞）と虚字に分け、モリソン Morrison（1815）『通用漢言之法』は particle substantive と称し、エドキンス Edkins（1857）*A Grammar of the Chinese Colloquial Language* は虚字（活字、死字）と実字の2つに分類した。
- 9 註8と同じく内田慶市（2003）によると、ラテン語文法に依るとき8つの品詞に分類され、英語文法に依るときは9つに分類される。これはイエズス会宣教師がラテン語、プロテスタント宣教師が英語文法に依って漢語の語法を分析しようとしたためである。
- 10 沈国威（2005）「大英図書館蔵の“英語文法小引”*Chinese-English Grammar 1864*」（『16世紀以降西洋人の中国語学研究的文献に関する調査研究 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書』所収）の品詞名対照表を参照。
- 11 この“口”は“兩口手槍”のように、武器を数える量詞である。
- 12 この“口”は“一口劍”のように、鋭利な刃物を数える量詞である。
- 13 本稿では、資料原文の用例を引用する場合、いずれも原文にもとづいて繁体字を使用する。
- 14 漢字の注音について、例えばこの“一”の [yat] のように、ロブシャイドは基本的に広東方言の発音によっている。
- 15 ロブシャイドは官話の用例を示すと同時に、広東方言では“𠵼”によって複数を表すことを紹介している。
- 16 ロブシャイドは広東方言の第二人称として“你, 你𠵼”を挙げている。
- 17 ロブシャイドは広東方言で所有格にあたる表現として“我嘅檯, 我嘅父親”などを挙げる。
- 18 ロブシャイドによると広東方言で“this, that”に相当する語彙は“呢個, 呢𠵼, 個𠵼, 個個”などである。
- 19 ロブシャイドによると広東方言は“幫襯我嘅係外國人, 我所招𠵼人”などの形式を使用する。
- 20 ロブシャイドによると広東方言の疑問代名詞には“乜野, 邊的, 乜誰, 乜”などがある。
- 21 “遭”に相当する広東方言の語彙として“邊”を挙げている。

- 22 11種の英語名称はそれぞれ Adverbs of Place, Adverbs of Time, Adverbs of Number and Order, Adverbs of Quality and Extension, Adverbs of Quality and Manner, Adverbs of Comparison, Adverbs of Indication, Adverbs of Interrogation, Adverbs of Affirmation and Negation, Adverbs of Conjunction and Disjunction, Adverbs of Conclusion である。
- 23 ここで言う「書面語」とは文言のことではなく、文字として記述されたことば或は文を指す。

参考資料・文献

- Lobscheid.W (1864) *Grammar of the Chinese Language*. HongKong:Daily Press.
- Lobscheid.W (1864) 『英話文法小引』 *Chinese-English Grammar*. HongKong:Noronha's Office.
- 内田慶市 (2005) 「《马氏文通》以前中国人的语法研究」『関西大学中国文学会紀要』26号
- 内田慶市・沈国威 (2005) 『16世紀以降西洋人の中国語学研究的文献に関する調査研究 平成14年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書』
- 賀楠 (2015) 「罗存德与19世纪50年代的香港教育」『或問』28号
- 那須雅之 (1995) 「ロブシャイト小伝」『愛知大学文学論叢』109号

